

第45回神戸女学院大学  
英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 松尾 歩

英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発表の機会の提供、および在学生の向学意欲の向上を目的として設立された神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) が、去る11月27日に第45回目を迎えました。今回はグローバル・スタディーズコースの担当で南出准教授による司会で、ウェビナーを使つての学会となりました。そのおかげで、オーストラリア国立大学で学位をとられご活躍中の田村恵子氏より「国境を越えた女たちのライフストーリー：オーストラリアの日本人戦争花嫁」という講演を遠隔で賜うこともできました。日本文学に描かれた戦争花嫁像への言及に始まり、太平洋戦争中に日本軍が南に進みニューギニアで日豪軍のジャングル戦が展開、1942年にダーウィンの空爆、シドニー湾の攻撃、11年間オーストラリア兵が焼け野原になっている呉に駐留し、そこで日本人女性との結婚が多くあったという歴史的説明がありました。出会いの後39人の日本人女性が船でオーストラリアに到着する場面や、戦争花嫁のインタビューなどの動画を実際に見る機会もありました。田村氏の人を惹きつける語り口で、日頃あまり考えることのない、国境を越えた花嫁とは？文化、人種、自然を越えるとは？また二国の歴史についても考え、全てを受け入れるという見解を学び、大変有意義な時間となりました。

毎年前半は本学大学院英文学専攻で学び、その後も研鑽を積んでおられる研究者に発表をお願いしております。今回は山内理恵氏より、「エミリー・ブロンテとD.H. ロレンスをつなぐ自然愛」というトピックで研究発表を賜りました。山内氏は本学大学院を卒業後イギリスの大学院を修了され、現在神戸市看護大学看護学部の教授をされています。今回の発表では、エミリー・ブロンテとD.H. ロレンスの作品に共通した

「自然愛」「死への恐怖」を指摘されました。また二人は抑圧されない感情を重視し、なぜロレンスがブロンテから大きな影響を受けたのか、ということについても詳しく拝聴することができました。

ウェビナーであったため国内外から60名を超える参加者が集まり、積極的な質疑応答などもあり、私たちも自身の研究との関わりについて考え、新しい視点を得ることができました。この学会の背後では多くの方がご協力、ご支援くださいました。講演をいただいたお二人の先生方を始め、卒業生、在学生、旧教職員、並びに他学科の先生方、教職員、及び日頃KCSESをご支援いただいている会員の皆さまにも御礼申し上げます。

KCSES

Kobe College Society of English Studies

第45回 神戸女学院大学英語英文学会

11/27 (FRI) 14:00~16:00  
オンライン開催

参加  
申込

- 11月20日(金)までに英文学科へメールにてお知らせください。(✉ e-office@mail.kobe-c.ac.jp)
- アクセス情報を別途お知らせいたします。

I 研究発表 (14:00より)

山内 理恵氏 (神戸市看護大学 人間科学領域言語科学分野 教授)  
「エミリー・ブロンテとD.H. ロレンスをつなぐ自然愛」

II 特別講演 (14:45より)

田村 恵子氏 (オーストラリア国立大学 Research Associate)  
「国境を越えた女たちのライフストーリー：オーストラリアの日本人戦争花嫁」

KCSES HP

神戸女学院大学文学部英文学科  
A New World in English 英語で、新しい世界へ  
☎ 0798-51-8548 ☐ e-office@mail.kobe-c.ac.jp



## 特別講演

# 国境を越えた女たちのライフストーリー オーストラリアの日本人戦争花嫁

田村 恵子

(オーストラリア国立大学アジア太平洋学部  
リサーチアソシエイト)

今回の英語英文学会は、全世界に広がったCOVID-19の状況を鑑み、初めてオンライン上での開催となり、私はオーストラリアから講演をするという機会をいただいた。はるか南半球の夏を迎えようとしている首都キャンベラから、岡田山のキャンパスを思い浮かべながらの講演だったが、アメリカやオーストラリア在住の広範囲の参加者があった。

当日は、太平洋戦争終了後の占領期に、駐留軍として日本に派遣された豪陸軍軍人と出会い、妻として1950年代に渡豪した日本人戦争花嫁たちの語りについて講演をした。日本人戦争花嫁は、占領期に駐留軍人と出会い、妻として夫の国へ移住をした女性たちで、約650人の日本人戦争花嫁が渡豪したと言われている。まず最初に、有吉佐和子の『非色』など、日本文学に描かれた戦争花嫁像を紹介した後、オーストラリアの太平洋戦争と占領体験を説明した。オーストラリアは主に広島県呉市を中心に、朝鮮戦争終了後の1956年まで日本に駐留した。

占領軍基地は重要な雇用の場として、ハウスメイド、ウェイトレス、タイピストなど多様な仕事を女性に提供し、豪軍兵との出会いのきっかけを作った。それはしだいに結婚を考える真剣な関係に発展する場合があった。一方、豪軍は反宥和政策を維持し、豪政府は日本人女性の豪入国を禁止していた。しかし1952年3月に入国許可が出た結果、花嫁たちの渡豪が可能になった。

当時のオーストラリアは、白豪主義を主張し、反日感情が強い国だった。戦後にヨーロッパから積極

的に受け入れた移民たちは、同化主義のもと、オーストラリア社会に適応することが期待された。変化は1960年代後半に現れて白豪主義が段階的に廃止された後、1970年代後半には同化主義から多文化主義へと転換した。

戦争花嫁たちの語りには、周囲の反対にもかかわらず、実際、結婚、移住を決意した彼女たちの意思の強さが行為主体性 (agency) として現れていた。同時に、移住後に経験した問題を日本の家族に打ち明けられないというつらさにもつながった。同化主義下、花嫁たちは子供をオーストラリア人に育てることを期待され、日本の言語や文化をあえて教えなかった場合が多い。一方、オーストラリアの価値観などが自己内在化されていないため、判断基準に苦勞した。日本人花嫁たちはプライベートなネットワークで互いに支えあい、オーストラリア社会では、日本人の代表として「日の丸を背中に背負って」生活してきたと語った人たちが多い。

戦争花嫁の語りは一般的な女性のライフストーリーとして、次のようにも要約できる。

平凡な家庭環境で育った若い女性が仕事に出て、若い男性と恋に落ちた。家族は二人の将来に懸念を示したが、二人の気持ちは強く、結婚をした。女性は実家を離れて、夫のもとに嫁いだ。ほとんどは出産育児のために家庭に留まり、専門職につくことはなく、夫も著名人ではなかった。60歳代後半になった段階で、夫に先立たれたが、経済的にはつつましいながらも安定した生活を営み、平穏な暮らしをしながら、孫たちや女友達との交流を楽しんでいる。

実際、多くの戦争花嫁たちは自分の人生をそのように見ていた。私のインタビュー依頼に対して、「どうして私なんかの話を聞きたいのかしら。何も大したことをお話しできないと思いますよ。だって私は平々凡々の生活をしてきたのだから」と答える人がほとんどだった。

しかし、この平凡さは、それぞれが歩んできた過去60年にわたる日本とオーストラリアの間の歴史的、文化的変化と重ね合わせると、突然並外れた人生に変化する。花嫁たちの語りには、ジェンダー、空間、時間の3つの要素がある。第一に、戦争花嫁の体験は、家族を中心とした女性の語りである。彼女たちは、日本で娘から独立心のある若い女性に成長し、渡豪後、妻と母になった。その行動は、家庭と社会に属する「女性」としてのものだった。第二に、日本からオーストラリアへと渡ったのは、文化、人種、国

第45回 神戸女学院大学英語英文学会  
2020年11月27日



## 国境を越えた女たちのライフストーリー オーストラリアの日本人戦争花嫁



オーストラリア国立大学  
田村 恵子  
keiko.tamura@anu.edu.au

家を移動したことを意味した。日本に別れを告げて、オーストラリア到着後は、全身全力で新しい生活様式に適應するように努力をした。彼女たちは、ヨーロッパ系白人が大多数だった国に移ることで、人種的な境界線も越えた。最後に、移住は、国家間の移動だった。太平洋戦争終了後まもなくだったので、両国の歴史解釈、特に戦争に関して、の違いに直面して、それを自分の中で整合するのは容易ではなかった。

そして戦争花嫁たちの体験は約60年間にわたるものだった。この間、日本は戦争の痛手から立ち直り、世界をリードする経済パワーを持ち国際化を奨励する国になった。その間、オーストラリアも白豪主義と同化主義から、多文化主義の国へと変化し、異文化に対する寛容性を受け入れるようになった。

以上論じてきたように、戦争花嫁たちの人生のジェンダー、空間、時間の3つの要素を重ね合わせて考えると、「平凡な人生」(ordinary life)が、実は「並外れた人生」(extra-ordinary life)に変化することに、彼女たち自身も、家族も、そして調査者だった私自身も驚かされた。

現代社会は大勢の人が頻繁に動くのが一つの特徴で、日本女性の海外への移動も増えている。特に女性の海外定住者数が近年増加しており、オーストラリアの邦人定住者の男女比は4:6である。21世紀に日本から海外へ移る女性たちにとって、戦争花嫁たちの体験は遠い昔の話のようかもしれない。しかし、生まれ育った文化を離れて、新しい文化社会に自分自身を適應させるだけではなく、異文化環境の中で子供をその後社会の一員として育てるという体験は、今の若い人たちのそれと大いに共通要素があると考えられる。

## 発表要旨

### エミリー・ブロンテとD.H.ロレンスをつなぐ 自然愛

山内 理恵

(神戸市看護大学 人間科学領域言語科学分野 教授)

エミリー・ブロンテ (Emily Brontë) とD.H.ロレンス (D. H. Lawrence) との作風の共通点や、前者が後者に影響を与えた可能性については、複数の批評家が言及している。しかし、彼らの多くは両作家の共通点や影響関係について軽く言及するにとどまり、その背景を深く追求した研究は少ない。一方で、「自然」はブロンテとロレンスの作品世界を表現する共通のキーワードであり、彼らがロマン派の影響を受け、自然崇拜や汎神論の側面を持つことはそれぞれの批評の中で繰り返し指摘されている。

そこで本論では、ブロンテとロレンスに共通する自然への強い愛情に着目した。そして、自然が人間をリラックスさせ、日常生活の中で溜まったストレスを軽減するという生物学や心理学における研究結果を使い、彼らの自然愛に潜む強いストレスの存在の可能性を論じた。さらに、ストレスの一因として、彼らが抱いた「死への意識」を指摘した。

ブロンテとロレンスが時代も性別も異なるにもかかわらず、同じように自然に強く惹かれた背景には、彼らの日常に共通していた「死を身近に感じさせる環境」があったと考える。彼らは、死と隣り合わせに生きることによるストレスを緩和してくれる自然の効果を、直感的に察知していたのではないだろうか。

ブロンテとロレンスの人生は「死」に溢れていた。バーカー (J. Barker) の伝記によれば、ブロンテ家が暮らした当時のハーワース (Howarth) では41パーセントの子供が6歳未満で死に、平均死亡率は25歳だった。また、ブロンテは『嵐が丘』執筆までに3歳で母親を、6歳で2人の姉を、24歳で叔母を亡くした。彼女の作品の多くには死の世界への言及が見られ、彼女が日常的に死を意識していた様子がうかがえる。一方、ロレンスが育った時代のイーストウッド (Eastwood) では炭鉱開発が急激に進み、岩盤落下による炭鉱夫の死が度々生じた。また、ロレンスは大量の犠牲者を出した第一次世界大戦を体験した。さらに、彼は16歳で兄アーネスト (Earnest Lawrence) を、25歳で母親を亡くした。幼少から病気がちだった

ロレンス自身も肺炎にかかって生死をさまよう体験をしている。彼にとっても「死」は身近な存在だったのである。

子どもが兄弟を亡くす衝撃について、看護学や心理学、精神医学などが研究を進めている。診療看護師の マハエフスキーとクロンク (V. Machajewski & R. Kronk) や精神科医のポロック (G. Pollock) などは、兄弟を喪った子供が自分の死に不安や恐怖を抱くと指摘する。一方、緩和ケアの研究においてストラング (P. Strang) は、自然などの「超越する力」との繋がりを感じることで、死への恐怖が和らぐと主張する。

ブロンテとロレンスは周囲の人々の死に直面しつつ、自らの死をも意識せざるを得ない状況に置かれていた。そのようにストレスがかかる日常の中で、彼らは自然がもたらす精神的癒しに気付き、自然を求めたのではないか。そして、自らの人生の土台とも言えるこの価値観をブロンテが共有すると知り、ロレンスは彼女に惹かれたと考えられる。

## 国際学会発表(会員氏名ABC順)

### \* 三宅伸枝 氏

“Imitated from the Japanese? Yeats and a Japanese Traditional Pop Culture Haiku”

ポーランド (University of Łódź) で開催された International Yeats Society Łódź Online Conference 2020 (2020年12月11-12日)にて研究発表。

### \* 奥本京子 氏

“Peace Education and Training Using Animation” オンラインで開催された INMP, International Network of Museums for Peace/ 第10回国際平和博物館会議 (2020年9月16-20日)にて研究発表。

### \* 立石浩一 氏

“Prominence Is Not Only Cued Acoustically.” Speech Prosody 2020 (The 10th International Conference on Speech Prosody) 東京大学主催、オンライン: <https://sp2020.jpn.org> (2020年5月25日-8月31日)にて研究発表。(Shinobu Mizuguchiとの共同研究)

## 会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

### ◇ 東森勲 氏

『ことばから心へ：認知の深淵』(米倉よう子ほか編、共著 開拓社、2020年3月刊) pp. 99-108

### ◇ 吉田純子 氏

「思春期文学の少女たちがトラウマを脱するとき-『若草物語』と『ウィーツィー・バット』の場合」(『立命館言語文化研究』32巻4号、2021年2月予定)

「ロイス・ラウリーの『ギャザリング・ブルー』にみる〈希望〉の表象-キラはなぜ「青を集める」のか?」(Tinker Bell 66、2021年3月予定)

## 英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も担当教員からの推薦による10名の応募を受けつけた。2月に英米文学文化、言語コミュニケーション、通訳・翻訳プログラム、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

### 英米文学文化 (応募者 1名)

<最優秀賞>  
該当者なし

<優秀賞>  
E17059 小松 睦実

### 言語コミュニケーション (応募者 5名)

<最優秀賞>  
該当者なし

<優秀賞>  
E17082 宮地 遥菜

### 通訳・翻訳プログラム (応募者 1名)

<最優秀賞>  
該当者なし

<優秀賞>  
E17155 徳丸 愛佳

## グローバル・スタディーズ（応募者 3名）

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

該当者なし

## 記念賞

2020年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

**タルカット記念賞** E18139 鷹取 まい

**デフォレスト記念賞** E18003 安達 美和

## 会員近況

<就任>

\*2020年9月より我喜屋まり子先生がBryant Drake 客員教授として就任されました。（～2021年8月）

<栄誉>

\*伊藤栄子名誉教授が令和2年春の叙勲で「瑞宝小授章」を受章されました。

\*原田園子名誉教授が令和2年秋の叙勲で「瑞宝中授章」を受章されました。

\*英文学科溝口薫教授が令和2年兵庫県功労者表彰（学術教育功労）を受賞されました。

\*英文学科南出和余准教授が2020年度「大同生命地域研究奨励賞」を受賞されました。

<訃報>

\*元英文学科教授山田由美子様が10月15日永眠されました。享年69。

天上の平安をお祈り申し上げます。

## 神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

(2010年 3月 2日改訂)

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英語英文学会大会を開催する。

Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。

(5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

#### I. 大会での発表について

(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

#### II. 維持費・参加費について

(1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。

(2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。

(3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。

(4) (3) に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



## 編集後記

今年度もKCSES学会員の皆様から研究活動報告・出版物のご連絡を頂き感謝申し上げます。コロナ禍で未曾有の苦難に見舞われた1年ではありましたが、オンラインによる学会開催をはじめ新たな可能性を模索し、多くの方々にご参加頂けましたことは何より心強い励みでした。ありがとうございました。なお、厚かましいお願いで恐縮ですが、神戸女学院教育振興会にご寄付を頂きます際には、「英文学科学生のために」と一言お書き添えを頂けましたら幸いです。学生たちの研究活動の補助に用いさせていただきます。皆様のご健勝と益々のご研究の発展を心よりお祈り申し上げます。

## KCSES Newsletter編集委員

(2020年度運営委員)

○Marcelo Fukushima ○松尾 歩 ○南出 和余 (ABC順)

## KCSES Newsletter No. 36

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2021年3月発行